

# 素材を用いた環境設定の有用性

—布遊びからみた5歳児の発達—

高原 和子\*・瀧 信子\*\*・矢野 咲子\*\*

Usefulness of the environmental setting using the material  
— The development of 5-years-old children in the play with the cloth —

Kazuko Takahara, Nobuko Taki and Sakiko Yano

## 概要

素材を用いた環境設定における5歳児の遊びを観察していると、遊びはじめの単独遊びから他児との協同的な遊びに発展していく様子が多数みられた。また、他児の遊びに触発されて模倣したり、挑戦したりする幼児や、素材を生かした遊びを思考・工夫し独自の遊びに発展させるなど、多様な遊びの展開がみられた。このような幼児の様子から、身近な素材を使った環境設定は、保育内容「5領域」のねらい及び内容を達成できるものと推察された。そこで、身近にある素材を利用した環境設定における幼児の遊びの様子を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をおいて分析し、幼児の発達からみた「布」を用いた環境設定の有用性について検討した。その結果、幼児は布の様々な操作とともに多様なからだの動きを出現させ、5歳児としての発達の特徴が認められた。その出現した遊びを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の内容で分類すると、すべての項目の内容を網羅することが確認された。よって、「布」を用いた環境設定は、5歳児の発達の視点からみても環境設定としての有用性が示唆された。

キーワード：環境設定、素材遊び（布遊び）、発達、5歳児、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

## はじめに

### (1) 教育要領・保育指針と環境

「環境を通した教育・保育」は、平成元（1989）年改訂の幼稚園教育要領<sup>1)</sup>に明記されて以来、現行の幼稚園教育要領<sup>2)</sup>、保育所保育指針<sup>3)</sup>、幼保連携型認定こども園教育・保育要領<sup>4)</sup>（以下、3法令）にも受け継がれ、保育実践の基本とされている。このことについて平山は、「教育や保育とは、環境からの働きかけを前提とした営み」であり、「保育から環境を切り離すことはできない」ことから、教育・保育は環境をとおして行うことが基本となると述べている<sup>5)</sup>。また、松島は、保育に関する「環境」の概念を整理し、「環境を通して行うときの『環境』は『保育者が子どもの発達を助長するために構成し続けていく環境』である」とまとめている。そして、子どもを取り巻く環境は、「子どもが自らその存在と関わることで子どもと環境との間に接点が生じ、子どもの心が動く体験をすることで発達につながる可能性をもつ」とし、「保育者が構成する環境によって子どもの発達が助長されることに加え、保育者が構成する環境を超えて、子どもの発達につながる環境がある」と述べている。それゆ

えに、「『保育者が子どもの発達を助長するために構成し続けていく環境』は、保育の原理として重要」であり、「『保育』という営みにおいて『環境』は子どもが育つさまざまな可能性を有している」と考察している<sup>6)</sup>。これらのことから、子どもの教育・保育において、環境との関わりは切り離せないものであり、重要な要素を含んでいることが確認できる。

「環境を通して行う教育・保育」を示す内容は、3法令にもそれぞれ明記されている（表1）。特に、「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。」（幼稚園教育要領<sup>2)</sup>）や、「子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。」（保育所保育指針<sup>3)</sup>）など、子どもが自発的・主体的に関わり、様々な経験を積んでいけるような環境を構成することが示され、保育現場に求められている。

\* 福岡女学院大学

\*\* 福岡こども短期大学

表1 3法令の「環境を通して行う教育・保育」関連部分（抜粋）

<p><b>幼稚園教育要領</b></p> <p><b>【第1章 総則 第1 幼稚園教育の基本】</b>          幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。このため教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。          （中略）          その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。</p>
<p><b>保育所保育指針</b></p> <p><b>【第1章 総則 1 保育所保育に関する基本原則（3）保育の方法】</b>          保育の目標を達成するために、保育士等は、次の事項に留意して保育しなければならない。          （中略）          オ 子どもが自発的・意欲的に関わるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。</p> <p><b>【第1章 総則 1 保育所保育に関する基本原則（4）保育の環境】</b>          保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、次の事項に留意しつつ、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。          ア 子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。          イ 子どもの活動が豊かに展開されるよう、保育所の設備や環境を整え、保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。          ウ 保育室は、温かな親しみとくつろぎの場となるとともに、生き生きと活動できる場となるように配慮すること。          エ 子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。</p>
<p><b>幼保連携型認定こども園教育・保育要領</b></p> <p><b>【第1章 総則 第1 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本及び目標等</b>          1 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本】          乳幼児期の教育及び保育は、子どもの健全な心身の発達を園りつつ生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼保連携型認定こども園における教育及び保育は、就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（以下「認定こども園法」）第2条第7項に規定する目的及び第9条に掲げる目標を達成するため、乳幼児期全体を通して、その特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とし、家庭や地域の生活を含めた園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならない。          このため保育教諭等は、園児との信頼関係を十分に築き、園児が自ら安心して身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、その活動が豊かに展開されるよう環境を整え、園児と共によりよい教育及び保育の環境を創造するように努めるものとする。          （中略）          その際、保育教諭等は、園児の主体的な活動が確保されるよう、園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、保育教諭等は、園児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、園児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。</p>

(2) 「幼児期運動指針」と環境

文部科学省により平成19年度から21年度にかけて実施された「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」の成果を踏まえ、平成24（2012）年に出された「幼児期運動指針」<sup>7)</sup>では、

「幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分に行うことは、多様な動きを身に付けるだけでなく、心肺機能や骨形成にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる」

と幼児期における運動の意義が述べられ、幼児期における遊びを中心とする身体活動は、「体力・運動能力の維持向上」と「健康な体の育成」に効果があるとされている。さらに、遊びを中心とする身体活動の実施は、体力や健康といったからだに関連する効果のみならず、「意欲的な心の育成」、「社会適応力の発達」、「認知的能力の発達」にも効果が期待されている。

また、幼児期は「基本的な動きを身に付けやすく、体を動かす遊びを通して、多様な動きを獲得されるとともに、動きを繰り返すことによって動きの洗練化も図られて」いき、「意欲をもって積極的に周囲の環境に関わることで、心と体が相互に密接に関連し合いながら、社会性の発達や認知的な発達が促され、総合的に発達していく時期」とされ、それゆえに、「幼児期における運動については、適切に構成された環境の下で、幼児が自発的に取り組む様々な遊びを中心に体を動かすこと」が必要であるとされている。具体的には、①多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること、②楽しく体を動かす時間を確保すること、③発達の特性に合った遊びを提供すること、が示され、「友達と一緒に楽しく遊ぶ中で多様な動きを経験できるよう、幼児が自発的に体を動かしたくなる環境の構成を工夫すること。」などの配慮が求められている。

### (3) 教育・保育の充実を図ることを目的とした環境設定 (先行研究)

ここまで、子どもの教育・保育を示した3法令と、子どもの心身の発達を図ることを目的に方向性を示した幼児期運動指針について述べてきたが、いずれにおいても、環境の充実・工夫が求められていることが窺える。

このような背景から、我々は、幼児期におけるイメージをもって主体的にからだを使って遊ぶことによる多様な動きの獲得と豊かな感性を育むための保育環境の工夫を図ることを目的に、幼児の活動における環境設定について検討してきた。

中でも身近にある素材<sup>脚注1)</sup>を用いた実践研究をすすめている。

これまで、素材として「ダンボール」や「布」を利用し、遊びの実践・分析を試みてきた。その先行研究の結果から、素材を用いた環境設定は幼児期に必要な基本的動作<sup>脚注2)</sup>が十分出現することが確認され、幼児の多様な動きの経験に繋がる可能性を示唆してきた<sup>8, 9, 10, 11, 12, 13)</sup>。また、幼児は、素材の特徴を活かした操作方法を創意工夫し、様々なイメージを持って遊び込み、活発な身体表現遊びへと発展させることも分かった<sup>14, 15)</sup>。これら先行研究から、幼児自らの主体的な身体活動を引き出す環境として、素材(ダンボール・布)を用いた環境設定は有用であることが確認された。

### (4) 身近な素材を使った環境設定と発達

先行研究における素材を用いた環境設定での幼児の遊びを観察していると、遊び始めは様々な操作を試みながら単独で遊んでいるが、やがて他児と共通の遊びを見つけ、協同的な遊びに発展していく様子が頻繁にみられた。また、他児の遊びに触発されて遊びを模倣したり、挑戦したりする幼児や、素材の性質に気づき、素材を生かした遊びを思考・工夫し独自の遊びに発展させる幼児など、多様な遊びの展開がみられた。このような幼児の姿から、身近な素材を使った環境設定は、保育内容「5領域」のねらい及び内容<sup>脚注3)</sup>を十分に達成できていることが窺えた。

そこで、これまで実施してきた身近にある素材を用いた環境設定における幼児の遊びの様子を発達に視点をおいて分析し、幼児の発達からみた素材を用いた環境設定の有用性について検討した。

## 方 法

本研究では、素材の中から「布」を用いた環境設定とした。また、分析における発達の視点としては、現行の3法令ではじめて明記された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」<sup>脚注3)</sup>に着目した。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、保育内容「5領域」に示されるねらい及び内容に基づいて乳幼児期にふさわしい生活や遊びを積み重ねることにより、資質・能力が育まれた子どもの具体的な姿として示されていることから、これを発達の目安とした。

その他、実施方法は次のとおりである。

### (1) 研究対象

保育所・幼稚園に通う5歳児を対象に、それぞれの園において布を使用した遊びを実施した。各保育施設の実施人数および使用場所は表2のとおりである。

### (2) 布遊びの実施方法 (環境設定)

遊びに使用した布は3種類(木綿・オーガンジー・タオル)である。この3種類の布(木綿:95cm×90cm、オーガンジー:115cm×100cm、タオル:68cm×130cm)は、幼児が自由に使えるように十分な枚数を準備し、遊びの間にいつでも使えるように、種類別に幼児

表2 各保育施設の対象児の人数と使用場所

保育施設	人数	使用場所
A保育園	17名 (男児9, 女児8)	小体育館
B保育園	19名 (男児5, 女児14)	遊戯室
C幼稚園	17名 (男児10, 女児7)	ホール

の目がとまり、且つ活動の支障にならない場所に設置した。

なお、布遊びの前には、幼児たちに対し、使用する布を示しながら遊びの説明を行った。その内容は、①いつでも自由に布を選んで遊んでよいこと、②用意した布以外の物は使わず、切ったり破ったりはできないこと、などである。(写真1)。

遊びの時間は30分間で、その間の遊びの内容に関しては、幼児の自主性に任せた。保育者および研究者(筆者)らは、指導や援助、声かけなどは行わず、安全管理と危険回避のみを行った。

実施は、2017年6月～2018年2月である。

### (3) 観察方法

布を使って遊ぶ幼児の様子を30分間ビデオカメラで撮影し記録した。その映像を基に、遊び込んでいる幼児、あるいは遊びが継続している幼児に焦点を当て、遊び・動き(動作)が出現した時点でビデオを停止し、その静止画像を保存するとともにその内容を記録した。この静止画像は、遊び・動き(動作)の分類・分析の際の確認に用いた。ただし、布を使わない遊びや、失敗などで遊び・動き(動作)が途中で終わったもの、完了されなかったものについては、データから除外した。

写真1 A 保育園における布遊び実施前の様子



写真2 C 幼稚園における布遊び開始直後の様子



### (4) 観察記録内容

予め記録表を準備し、遊び・動き(動作)の出現する度に記録した。記録の内容は、遊び・動き(動作)の出現時刻、遊び・動き(動作)の具体的な内容、遊び・動き(動作)の分類、布の種類と使い方、仲間との関わりである。また、イメージを持って遊び込んでいる時の幼児の言葉や、その様子から幼児がイメージしているものを推測し記録した。

### (5) 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、事前にそれぞれの園の保育者と保護者に対し研究の趣旨を説明し、ビデオ撮影の承諾と同意を得て実施した。また、その際、本研究における収録映像等は、研究のみに使用することも伝えた。

## 結 果

幼児は、遊びはじめの段階では、3種類の布の中から使いたい1枚を選び、布の扱い方を試すように様々な操作や動作を試みていた(写真2)。そして、一通り布を扱ったその後は、自分の使いたい布をその都度選び、時間いっぱい(30分間)遊び込み、遊びの展開が途切れることはなかった。

遊びの中で幼児は、布の様々な操作とともに多様なからだの動きを出現させていた。また、仲間とイメージを共有して表現し、それを楽しむ姿もみられ、次から次に遊びを繰り返していた。その中で特に、「遊び込んでいる」「工夫している」「他児とかかわっている」「自分(たち)なりのルールをみつけている」場面を抽出し、それらを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の条文に書かれている項目に当てはまる遊びの姿で分類を試みた。出現・抽出した幼児の遊びの姿(動きや表現)は、複数の項目にあてはまるものも多くあったが、特にそれぞれの項目の姿に近いと思われるもので分類した。その結果、以下のとおりに分類できた。

### ア 「健康な心と体」(図1)

本研究で出現した幼児の遊びのほとんどは、この条文の中の「充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動」の項目に該当していた。中でも、布を

- ・(いろいろな方法で) 投げる、回す、滑らせる
- ・いろいろな持ち方で歩く・走る

などの操作と移動が組み合わされた動作が多数観察され、「自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ」る姿がみられた。

図1 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「ア 健康な心と体」に関わる姿（遊び）

(保育所保育指針)

保育所<sup>3</sup>の生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。



<sup>3</sup>3法令により異なる。幼稚園教育要領：幼稚園、幼保連携型認定こども園教育・保育要領：幼保連携型認定こども園

### イ 「自立心」(図2)

条文の中の「身近な環境（本研究では「布」）に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で（中略）自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい」の部分については、次の場面があげられた。

- ・ 布を床に敷いて寝転がる
- ・ 布を床に敷き、腹ばいに乗って滑る
- ・ 布を床に敷き、立って乗り足で滑る
- ・ 布を頭上に放り上げたり、遠くに投げたりする
- ・ 布を前に置いて跳ぶ
- ・ 両手を使って布の両端を持ち、回して跳ぶ（縄跳び）
- ・ 布を頭からすっぽり被り、隠れる

図2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「イ 自立心」に関わる姿（遊び）

(保育所保育指針)

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。



### ウ 「協同性」(図3)

条文の中の「お互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げる」については、次の場面があげられた。

- ・ 布を持ったり、羽織ったりして仲間と一緒に走る
- ・ 布を羽織って集団で追いかけて走る（鬼ごっこ）
- ・ 1枚の布を引っ張り合う
- ・ 布の上に他児を乗せ、布の端を持って引く（ソリ遊び）
- ・ 布の上に人を乗せ、複数で協力して端を持って引く（集団ソリ遊び）
- ・ 布をマントにして、手を繋いで走る
- ・ 布を振り回して、戦う（戦いごっこ）

図3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「ウ 協同性」に関わる姿（遊び）

(保育所保育指針)

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。



### エ 「道徳性・規範意識の芽生え」(図4)

条文の中の「友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる」「きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりする」については、次の場面があげられた。

- ・ 相手に合わせて力加減を調整する
- ・ 複数で引くソリ遊びで、乗る順番を決める
- ・ 集団で遊びのルールを決める

図4 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「エ 道徳性・規範意識の芽生え」に関わる姿（遊び）

(保育所保育指針)

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。



### オ 「社会生活との関わり」(図5)

条文の中の「人との様々な関わりに関わり、自分が役に立つ喜びを感じ」については、次の場面があげられた。

- ・ 友だちが布を結ぶのを手伝う
- ・ ソリ遊びで相手が喜ぶのを楽しみながら布の端を持って引く
- ・ ゾンビになった友達に合わせて逃げる

図5 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「オ 社会生活との関わり」に関わる姿（遊び）

(保育所保育指針)

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考える関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、保育所内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。



<sup>3</sup>3法令により異なる。幼稚園教育要領：幼稚園、幼保連携型認定こども園教育・保育要領：幼保連携型認定こども園

## カ 「思考力の芽生え」(図6)

条文の中の「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりする」「友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりする」については、次の場面があげられた。

- ・相手と遊びの相談をする(自分の考えを伝え、相手の考えを聴く)
- ・相手と同じやり方で投げる(模倣し、挑戦する)
- ・他児が布を敷いて腹ばいに寝ているのを真似て、同じように横に布を敷いて腹ばいになる
- ・他児が布を床に敷き、立って乗り足で滑るのを模倣し、自分も挑戦する
- ・他児が布の端を両手で持ち、回して跳んでいるのを模倣し、自分も同じように跳べるように工夫する
- ・他児が片手で布を持って回しているのを模倣する

図6 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「カ 思考力の芽生え」に関わる姿(遊び)

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。



## キ 「自然との関わり・生命尊重」(図7)

この条文にある「自然に触れて」や「身近な動植物」を体験する環境設定ではないため、直接当てはまる場面はなかった。ただし、「好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まる」「生命の不思議さや尊さに気づき(中略)大切にすることを覚えるようになる」については、条文にあるような日常の経験からくる育ちにより、間接的なつながりとして場面に現れていた。例えば、以下のような場面である。

- ・オーガンジーを投げふわりと落ちてくるところに空気の流れ(風)を感じる素振りをみせる
- ・布を重ねて包み、赤ちゃんに見立てて大切に抱く

図7 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「キ 自然との関わり・生命尊重」に関わる姿(遊び)

(保育所保育指針)

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。



## ク 「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」(図8)

この条文に示されている「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚を持つようになる」については、遊びそのものの出現ではなく、遊びをはじめ準備の段階や遊びに伴って出現することが多く、次の場面があげられた。

- ・集団で二手に分かれて遊ぶ際に、人数を数える
- ・競走場面で順位を決める
- ・遊びに適するように、布の形を整えたり、大きさを調整したりする

図8 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「ク 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」に関わる姿(遊び)

(保育所保育指針)

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚を持つようになる。



## ケ 「言葉による伝え合い」(図9)

条文の中の「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむ」については、次の場面があげられた。

- ・相手と遊びの相談をする(言葉で考えを伝え合う)
- ・布の上に相手を乗せ、複数で布の端を持って引く場面などで、皆で相談してやり方を決める
- ・集団でルールを決めて走る(言葉でルールを話し合う)

図9 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「ケ 言葉による伝え合い」に関わる姿(遊び)

(保育所保育指針)

保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。



※3法令により異なる。幼稚園教育要領：先生、幼保連携型認定こども園教育・保育要領：保育要領：保育教諭等

## コ 「豊かな感性と表現」(図10)

条文の中の「様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつ」については、次の場面があげられた。

- ・ 独自のソリ遊び(滑り方)を楽しむ
- ・ 複数で引くことでソリ遊びのスピード感を味わう
- ・ ゾンビになって友だちを驚かせる
- ・ 布の巻き方や被り方を工夫して、自分なりのお姫様を表現する

図10 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「コ 豊かな感性と表現」に関わる姿(遊び)

(保育所保育指針)

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。



## 考 察

幼児は素材を用いた環境を設定すると、その素材を使って様々な操作し、次から次に遊びを展開し、多様なからだの動きを出現させる。その中で、それぞれの素材の特徴を掴みながら、その特徴に応じた遊びを工夫したり、仲間とイメージを共有して表現したりして、遊びを楽しむ姿がみられる。このような幼児の姿を目の当たりにすると、幼児教育が目指す“子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うための環境を通した教育”とは、まさしくこのようなことではないかと考えさせられた。そして、保育内容「5領域」のねらい及び内容をとおして育まれることにより達成される子どもの姿とは、このような姿なのではないかという考えに至った。

このような概観から着想を得て、身近にある素材(本研究では「布」)を用いた環境設定における幼児の遊びの姿を発達に視点をおいて観察し、分析を試みた。

発達の視点としては「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を目安とした。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、乳幼児期の長い育ちを通して5歳児後半に特に伸びていく5領域の内容を10項目に整理したものである。そこで、本研究では、この10項目を発達の視点としてその時期にあたる5歳児を対象に布遊びの姿から分析し、そこから様々な面(発達)を捉え、環境設定としての布の有用性と、保育の質の向上をめざした環境設定のあり方と手立てについて検討した。

## (1) 布遊びにみられた幼児の姿と発達

本研究における布遊びにみられた子どもの姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の条文に照らし合わせて分類した結果に基づいて、幼児の発達について考察する。

### ア 布遊びにみられた「健康な心と体」

人としての基盤を培う乳幼児期においては、様々な活動をとおして心と体が双方向に影響し合いながら心と体の健康が養われる。その心と体の健康をつくりあげる上でもっとも必要なことは、遊びを中心としたからだを動かす活動を十分に行うことと考える。

「幼児期運動指針」では、幼児期における運動(からだを動かす活動)の意義として、「幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分行うことは、多様な動きを身に付けるだけでなく、心肺機能や骨形成にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる」<sup>7)</sup>と述べられている。このことから、幼児が環境と関わり、主体的にからだを動かす活動を実施することは、「健康な心と体」を育成することに繋がるものと考えられる。

「健康な心と体」は、保育内容において主に領域「健康」の内容と深く関わっている。領域「健康」のねらいとしての「明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう」、「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」ことで「健康な心と体」は培われ、「他者との信頼関係の下で、自分のやりたいことに向かって伸び伸びと取り組む中で育まれていく」<sup>16)</sup>と考えられる。このことから、幼児自らが意欲的・主体的にからだを動かす活動に取り組むことが肝要となる。そのため、それができる環境を用意することが保育現場には求められる。

本研究で実施した布を用いた環境設定でみられた幼児の姿は、まさしくこの「健康な心と体」で示されている「自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ」る姿であった。特に多く出現したからだを使った遊びは、布を「投げる・回す・滑らせる」など、布の特徴を掴んだ操作動作<sup>脚注4)</sup>が多く観察され、また、その操作動作に「歩く・走る」などの移動動作<sup>脚注5)</sup>が加わったダイナミックな遊び(動作)へ発展していく様子が捉えられた。その要因としては、布という素材が幼児にとって扱いやすい素材であったことが考えられた<sup>13,15)</sup>。

幼児の保育や活動実践における布の有用性については、いくつかの研究が報告されている。松山<sup>17)</sup>、伊藤<sup>18)</sup>は一連の報告で、布の質感や動きを感じることでイメージが広がり、友だち同士でイメージを共有しやすいことから、幼児の表現遊びにおける素材としての布の有用性を述べている。古屋は、布という素材は「様々な形状に変化させることができ、ある程度の強度があるため、包む・乗せる・丸める・引っ張る等、多様な特性を有する用具である」とし、そのため幼児にとって自分の

イメージを動きで表現することや、活動を通じた他者との関わり合い等において有効な手段となり得ると述べている<sup>19)</sup>。梅原は、「楽しく遊ぶための道具や遊具は、幼児が一つの遊びに固まらず、多種多様な動きを探索し、創作することができるような可変性に富んだ物（素材）が望ましい」とし、その点、布は幼児の自然な動きを妨げず、感覚と運動の両者を刺激していく道具として最適であると述べている<sup>20)</sup>。また、布について、①安全性：素材が柔らかく安全である。②簡易性：腕・手首などの筋力が弱くても、操作が容易である。③可変性：空気の抵抗で形が様々に変化するので視覚的にも楽しめる。④耐久性：踏んだり引っ張ったりしても、壊れることがない。⑤融通性：安心して、誰でもすぐに溶け込める、とした5つの特性を上げ、その有用性について報告している<sup>21)</sup>。これらのことから、幼児の活動において布は、活発な活動を促す素材として適しており、であるからこそ「健康な心と体」に繋がるような活動が現れ易かったと考えられた。

このように意欲的・主体的に取り組む中で、幼児は考えたり想像したり工夫したりを繰り返す。そのことでより一層活発な活動が促され、からだを動かすことで楽しさや心地よさが生まれ、ますますからだを動かすことになる。それは多様な種類の動きを出現させ、そのことが「自ら健康で安全な生活をつくり出す」ことに繋がるものと考えられる。よって、布を用いた環境設定は「健康な心と体」の育成に寄与するものと示唆された。

#### イ 布遊びにみられた「自立心」

「自立心」は、「幼児教育において育みたい資質・能力」の三つの柱<sup>22)</sup>の1つの「学びに向かう力」に直結した幼児教育の中核的な部分を表し、近年注目されている「非認知能力（社会情動的スキル）」にあたるものとされている<sup>23)</sup>。また、「学びに向かう力」とは、「自分の気持ちを言う、相手の意見を聞く、物事に挑戦するなど『好奇心』『自己主張』『協調性』『自己抑制』『がんばる力』の5つの力から成り立つ」とされている<sup>24)</sup>。

この自立心について「保育所保育指針解説」（以下、「解説」とする）<sup>25)</sup>では、「保育者との信頼関係を基盤に自己を発揮し、身近な環境に主体的に関わり自分の力で様々な活動に取り組む中で育まれる」とされ、「遊びや生活の中で様々なことに挑戦し、失敗を繰り返す中で（中略）、保育者や友達の力を借りたり励まされたりしながら、難しいことでも自分の力でやってみようとして、考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げる体験を通して達成感を味わい、自信をもって行動する」姿として現れると考えられている。

本研究においてそのような幼児の姿（布の特徴を活かし、様々な使い方を自分なりに考え、工夫し、失敗しても諦めずに、自分のイメージしたことや、やりたいことに向かって何度も遊びを繰り返す姿）は終始頻繁に現れていた。「布を投げる遊び」を例にとると、誰かが偶然

はじめた遊びに他児が興味を示し、布を「投げる」遊びがはじまった。布は広がったままではなかなか上手く投げられず、はじめは苦戦していたが、やがて何かの拍子に思いのほか高く上がった。それを機に「高く、遠くに投げる」ことに挑戦しはじめた。友だちよりも「高く、遠くに投げる」ために、ただ「投げる」だけの行為を何度も飽きることなく繰り返し、一喜一憂しながら遊びに興じていた。やがて、他に興味をそそる遊びが目にとまるとそちらの遊びに移行していくが、ときどき思い出しのように「高く、遠くに投げる」姿がみられた。

この「諦めずに繰り返す」姿はまさしく5歳児ならではの姿であると考えられた。諦めずにやり遂げることでいつしか納得のいく「高く、遠くに投げる」ことができ、達成感を味わうことで「自立心」の一端が育まれるものと考えられた。このような行為が見られたことから、布を用いた環境設定は「自立心」を起こさせる環境設定であることが示唆された。

#### ウ 布遊びにみられた「協同性」

協同性について、「解説」<sup>26)</sup>では、保育者等との「信頼関係を基盤に他の子どもとの関わりを深め、思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わう中で育まれていく」とされ、「自立心」や「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」とともに領域「人間関係」との関連が深い。この関わりについて、矢藤は、「『自立心』を基盤としながら、子どもが人と関わる力を、とりわけ子ども同士が遊ぶ過程で培い、『道徳性・規範意識の芽生え』をもたらし、『社会生活との関わり』にも繋がっていく」とし、その中で「協同性」は「子どもの遊びが展開するプロセスに立ち現れる」と述べている<sup>27)</sup>。このことを領域「人間関係」の「内容」では、⑤友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う、⑥自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く、⑦友達のよさに気付く、一緒に活動する楽しさを味わう、⑧友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする、とし、これらのことを体験する中で育まれる幼児の姿として描かれている。

「協同性」において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の条文や領域「人間関係」の「内容」に頻繁に出でくる「友だちとの関係」は欠かせない。それは、「子どもは、友達と関わる中で、様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わい、友達との関わりを深めて」いき<sup>28)</sup>、そして「その中で互いの思いや考えを共有」し、「共通の目的」をもって「その目的の実現に向けて、考えたことを相手に分かるように伝えながら、工夫したり、協力したりし、充実感をもって子ども同士でやり遂げる」<sup>29)</sup>からである。このように、幼児期では、人、とりわけ友だちとの関係の中で「協同性」は培われていく。ただし、単に他の子



どもと一緒に活動できることを優先するのではなく、それぞれの持ち味が発揮され、互いのよさを認め合う関係ができてくるのが大切<sup>26)</sup>とされており、「完成度ではなく、互いに協力して、先の目的のイメージを具体化し、そこに向けて工夫する過程が大切」<sup>28)</sup>とも言われている。

本研究でみられた遊びでは、遊び始めこそ、それぞれが布の様々な使い方を試行錯誤して個別に遊ぶ姿がみられ、布からイメージした見立て遊びを中心とした個別の表象的遊びであったが、ほどなく周りの友だちと協調して一緒になって遊びはじめた。仲間同士で布を羽織って同じ格好になり一緒に走ったり、布を振り回しているうちに戦いごっこがはじまったり、布の上に他児を乗せて端を持って引くソリ遊びをしたりなど、複数の幼児によるからだを使った活発な遊びが多く出現していた。このような場面では、おのずと互いの思いや考えを共有し合い、工夫したり、協力し合ったりすることが多くなり、その様子が観察された。西川らは、運動（からだを使った）遊びは、友だちと一緒に行うことで、自然に協力し合う雰囲気を作られ、互いの意見を共有しながら遊びを工夫することから協同性は十分に育成可能であると述べている<sup>29)</sup>。また、運動遊びの中で、協力する声かけや、「こうした方がいい」などの主張や提案もみられることから、自分と異なる考えを持つ友だちの存在に気づいたり、意見に共感したりすることで友だちの良さを知り、互いに尊重する姿勢も養うことに繋がると示唆している<sup>29)</sup>。

このように幼児が複数集まった中では、人と人が交わることから「協同性」は生まれやすいと考えられる。特に、表象が獲得された5歳児では象徴遊びによる協同遊びが顕著になるため、「協同性」を発揮する場面も多くなる傾向にあると考えられる。本研究においても協同的な遊びは多くみられた。そのきっかけは、「模倣」であり、その発展としての複数の幼児による「ごっこ遊び」であった。誰かのアイデアではじめた遊びを近くにいた別の幼児が模倣し、その遊びをさらに別の幼児が模倣することで複数のそれぞれの遊びがはじまった。その中で、誰かの「こうしたらもっとおもしろい」のアイデアによって複数の幼児が参加した協同的な遊びに発展していく、そのような遊びの展開が観察された。例えば「ソリ遊び」はその典型であった。はじめは、布に一人を乗せて別の一人が布を引く単独の遊びから、複数の集団遊びに発展していった（図11）。遊びをもっと楽しくするという共通

の目的に向かって、イメージを伝え合い、皆で工夫し協力する姿から、本研究の布を用いた遊びは「協同性」を起こしやすいことが確認された。

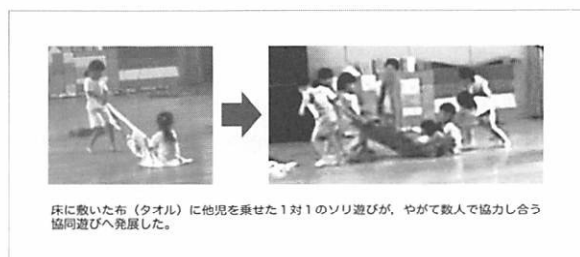
また、この遊びの展開では、まず模倣をきっかけに少人数の遊びからはじまり、その後、複数が参加する集団遊びに発展する例が多く観察された。上林によると、「2人くらいの組み合わせが、様々な2人くらいになっていくことで、遊びや仲間の広がりが見られるようになってくる」として、協同的な遊びの発達を支えるポイントは、少人数でのイメージやテーマの共有、思いや考えなどの伝授、共感・共鳴の経験が積み重なることで協同的な遊びの姿を生み出す基礎となることを報告している<sup>30)</sup>。また、協力状況を生み出すには「物」の存在は有効であることも示唆している<sup>30)</sup>。このことから、本研究における布を用いた遊びの状況は、協同的な遊びへ発展する条件が揃い、「協同性」を生み出しやすい環境設定であったと考えられた。

## エ 布遊びにみられた「道徳性・規範意識の芽生え」

「道徳性」については、幼稚園教育要領の「総則」に「道徳性の芽生え」として記されていたものが、1998（平成10）年の改訂から領域「人間関係」の中で示されるようになった。また、「規範意識」については、2008（平成20）年の改訂で同じく領域「人間関係」に加えられた。この流れを受け「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に「道徳性・規範意識の芽生え」として示されている。この姿は「（保育施設）の生活における他の子どもとの関わりにおいて、自分の感情や意志を表現しながら、時には自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験を重ねる中で育まれていく」<sup>31)</sup>とされ、自我の芽生えや自他の分化の発達を背景に様々な経験の中でコトの良し悪しや相手を思いやる気持ち、自己を抑制し調整しようとするなど培われていく<sup>32)</sup>。

本研究の遊びの場面では、友だちとの関わりの中で、「共感や思いやり」、「きまりをつくる・守る」、「自分の気持ちを調整し折り合いを付ける」などの姿が観察された。ソリ遊びの場面では、布に乗っている友だちが落ちないように力加減を調整しながらそっと布を引く様子が見られ、それまでの体験を重ねた5歳児としての相手の立場に立って考えながら行動する姿や、思いやりの態度が確認できた。また、集団で遊びを展開する場面では、特に道徳性や規範意識の姿が見て取れた。複数のソリ遊びでは、乗る順番や交代のタイミングを決める様子が見られ、その際、それぞれの意見を出し合い、公平に遊びが実行できるようにしていた。布をマントにしてヒーローになって走り合っている場面では、皆でやり方を決め、自分たちなりの遊びのルールを守って走っていた。順番や遊びのルールを決める際には、時には自分の気持ちを押し殺し、折り合いを付けることも多くあったであろうが、幼児たちなりの道徳性や規範意識をもって遊びを成り立たせていたと考えられる。このような幼児の集団遊びの

図11 工夫して見つけた遊びから集団での協同遊びへ発展した例



展開から道徳性や規範意識の発達を論じた鈴木らの研究では、道徳性や規範意識の形成には幼児同士の感情的繋がりや構築が影響しているとし、その条件として「役割を見出す」「自己成長の実感」「帰属意識」が関与していることを報告している<sup>33)</sup>。保育施設という集団生活で様々な体験を共にし、その中で仲間意識や役割を学び、心身ともに成長することで道徳性や規範意識が育まれていくことが、本研究でも確認することができた。そしてそこには「遊び」が介在し、重要な要素となっていることも示唆された。その遊びを促す上でも環境設定は重要である。湯浅らは、道徳性・規範意識の芽生えを育む上での環境の重要性を述べ、幼児たちが興味をもつ素材を多様に用意し、それらにじっくり関わり、一緒に自由に楽しめる場を設けることを上げている<sup>34)</sup>。このことから、本研究で設定した身近な素材「布」を用いた環境設定は、道徳性・規範意識を育む上でも有用であったと考えられた。

#### オ 布遊びにみられた「社会生活との関わり」

幼児は、普段は家族や保育施設で出会う保育者や他児といった限られた人的環境の中で生活し活動しながら、自分のことを伝えたり、相手の気持ちをくみ取ったりして信頼関係を構築しているが、さらに地域の身近な人(小学生や中学生、高齢者や働く人々)と触れ合う体験の中で様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみを持つようになる<sup>35)</sup>。この広がった体験を重ねる中で幼児は、「人々との様々な関わり方に気づく」「自分が役に立つ喜びを感じる」「情報を役立てながら活動する」ようになると考えられている<sup>35)</sup>。

本研究において、これらの姿として最も現れたのは「自分が役に立つ喜びを感じる」であった。例えば、布の端を結ぶことに苦労している幼児に対しそれを見つけた他児が手伝ったり、相手が喜んでくれることを期待して遊びを仕掛けたりする姿などとしてみられた。これらの行為をすることによって、相手に喜ばれ、感謝される。それによって仕掛けた幼児自身は嬉しくなる。その結果、その遊びは一層楽しくなり、幼児は満足感を得ることになる。このような姿が本研究でもところどころで観察され、その度に遊びが盛り上がっていく様子が確認された。

このような「自分が役に立つ喜びを感じる」体験は、重ねることで、自分が有用な人間であるという意識が高まり、幼児自身の有能感に繋がると考えられる。そして、もっと人の役に立ちたいという意欲にも繋がると考えられる。よって、集団で群れて遊ぶことは、幼児の人としての望ましい振る舞いを経験する機会を設けることとなり、社会生活を築く上での基盤を培うことになると考えられた。さらに、その遊びに物的環境(本研究では素材の「布」)が介在することで、その物的環境を通したエピソードや繋がりも生まれ、より体験する機会となり得るのではないかと推察された。

#### カ 布遊びにみられた「思考力の芽生え」

「思考力の芽生え」は、解説では「周囲の環境に好奇心をもって積極的に関わりながら、新たな発見をしたり、もっと面白くなる方法を考えたりする中で育まれていく」<sup>36)</sup>とあり、領域「環境」に関わるとされている。なお、他の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」同様、一つの領域のみではなく、他の領域に示すねらい及び内容に基づく保育活動全体を通して育まれる。特に、領域「人間関係」とは密接に関わっている<sup>37, 38)</sup>。また、幼児教育における「環境」は、物的環境、人的環境、自然環境等、幼児を取り巻くすべてが対象となるが、本研究においては布を用いて集団で遊ぶという環境設定であることから、布という物的環境と、それを介在した幼児同士の関わり(人的環境)という点から、思考力の芽生えを読み解くこととする。

幼児は与えられた環境の中で積極的に関わっていた。まず、手にした布をどう扱うか試行錯誤からはじまった。触って、丸めたり捻ったりして布の質感を感じ取り、振ったり投げたりしたときの動きを確かめ、両手で端を持って広げたり頭から被ったりして大きさをからだで確認するなど、様々な扱いで確かめていた。その中で見つけた面白い扱い方や動きで遊びがはじまり、そのうちにもっと面白くするために考えを巡らせ工夫を加え、面白そうな遊びをしている他児を模倣して一緒に遊んだり、遊ぶ中で相談して新しい考えに気付いたりして、常にからだ全体を使って面白い遊びを追求していた。これは、「(幼児は)与えられた環境の中で遊ぶことに満足するのではなく、遊びが深まる中で主体的に環境に働きかけ、より楽しく遊ぶための工夫、探求をする」とした西川ら<sup>39)</sup>が示した姿と同様であった。すなわち、本研究の布を用いた環境設定で遊ぶ幼児の姿が「思考力の芽生え」の条文中で示されている「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりする」「友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりする」姿であった。このような幼児の自発的・主体的なからだを使った遊びが展開され、その中で「思考力」に関する姿が現れた理由としては、「布」が幼児の身近で扱いやすい物的環境であったことに加え、先にも述べたように「布」が「様々な形状に変化」<sup>19)</sup>できる「可変性に富んだもの」<sup>20)</sup>であったことが、幼児の試行錯誤を促し、様々な「思考力」に繋がったと考えられた。よって、本研究の布を用いた環境設定は、「思考力の芽生え」を生起しやすく、幼児の思考力を育むことに寄与すると示唆された。

#### キ 布遊びにみられた「自然との関わり・生命尊重」

この「自然との関わり・生命尊重」は、保育の歴史の中でも大切にされてきた内容<sup>39)</sup>とされ、乳幼児期における自然の持つ意味は大きい。自然を体験することから心は安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎

が培われる<sup>40)</sup>とされている。よって、保育施設では、「身近な自然と触れあう体験を重ねながら、自然への気付きや動植物に対する親しみを深める」<sup>41)</sup>ことが求められる。

本研究において、ここで求められている「自然に触れて」や「身近な動植物に接する」環境設定ではないため、そこから論ずることはできないが、条文の中には、「自然の変化などを感じ取り」「好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現」「身近な事象への関心が高まる」「自然への愛情や畏敬の念をもつ」「生命の不思議さや尊さに気付き」「大切にする気持ち」といった子どもの自然体験による姿が描かれている。そこで、ここで描かれている姿に照らし合わせて、本研究においてみられた幼児の姿を検証してみた。すると、いくつかそれと思われる姿を捉えることができた。例えば、布（オーガンジー）を放り投げた際に、布が風をはらんでふわりと落ちてくる様を楽しんでいる幼児の姿である。その様子からは、ただ投げて捕るだけの動作的な遊びではなく、「風」「空気」といった自然の不思議さを感じているように推察された。また、布を布で“おくるみ”のように包み、大切に胸に抱えて歩く姿からは、「命の大切さ」を感じさせられた。このことから、普段から自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付き（領域「環境」の内容①）、身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする（領域「環境」の内容⑤）などの体験をとおして培われた心情や態度が、素材（布）を介した遊びとして現れた。そのことが確認できたことにおいて、本研究の環境設定は意義あるものであったと考えられた。

#### ク 布遊びにみられた「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」

条文に示されている「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚を持つようになる」については、領域「環境」のねらいの「身近な事象をみたり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする」や、その内容にある「⑨日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ」、「⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに興味や関心をもつ」に関連している。また、「文字などに親しむ」については、領域「言葉」の内容の「⑩日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」と関連している。このことから、この条文で示されている内容は、「環境」と「言葉」の領域に関わっており、日常の遊びや生活の中でこれらの内容を含んだ体験を通して育まれていくと考えられる。ただし、ここでは、領域「環境」に関連するところの数量や図形を中心に考察する。

幼児期において、数量や図形に親しみ感覚を豊かにすることは重要で、日常の生活、特に遊びを通して関わる

ことが大切とされ<sup>42, 43, 44, 45, 46, 47)</sup>、幼児が遊びを通して多様な経験を積み重ねていく中でこそ数量や図形への感覚は育まれていく<sup>46)</sup>とされている。

幼児の遊び、中でもからだを使った遊び（運動遊び）の場面では、数や長さ、大きさ、広さ、速さ、形（標識を含む図形）などにふれることは多い<sup>29)</sup>。そのため、からだを使った遊びの体験を通して数量や図形に親しむ機会も増える傾向にある。例えば、鬼ごっこでは、その種類によってチームの人数や陣地の広さが関わったり、安全地帯の独特な形や印があったり、移動の速さに制限があったりと、一つの遊びの中で複数の数量や図形に関わることがある。子どもは、このような遊びの中での必要感に基づいて、興味や関心、感覚を身につけていくと考えられる。

本研究においても集団で二手に分かれて遊ぶ際の人数調整や、競走場面での順番や順位決めなど、遊びをはじめ準備の段階や遊びの進行に伴って数量や図形に関連する場面がみられた。また、布を使った遊びであったことから、布の形を変えたり大きさを調整したり、形にこだわる場面もみられた。このように形を変えることのできる「布」を用いた環境設定であったことで、遊びそのもので体験できる以上の形（図形）の体験ができ、その分、形（図形）への関心や感覚に親しむ機会も増えたのではないかと考えられた。

山名は、数量や図形の感覚を豊かにするということは、大人の概念をそのまま子どもに教えることではない。子どもが遊びの中で自然と物を比べあったり、数を教えあったり、何かを配ったりすることで身につけていく感覚を理解し、育むことであると述べている<sup>49)</sup>。また、その指導において森は、遊びや生活の中で、子どもの活動の展開を見通して行われる必要があり、子どもの「やってみたい」「知りたい」という内発的動機づけに基づいた活動が安心して展開される応答的な環境をつくり出すことが大切であるとしている<sup>45)</sup>。これらのことから、本研究の布を用いた環境設定は、数量や図形の感覚を豊かにする環境であった可能性を示唆するものであった。

#### ケ 布遊びにみられた「言葉による伝え合い」

「言葉による伝え合い」は、領域「言葉」との関連が深く、「身近な親しい人との関わりや、絵本や物語に親しむ中で、様々な言葉や表現を身に付け、自分が経験したことや考えたことなどを言葉で表現し、相手の話に興味をもって聞くことなどを通して、育まれる」<sup>48)</sup>とされている。領域「言葉」は、前述の「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」とも関連が強く<sup>49)</sup>、条項に「文字などへの関心」がある「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」にも関連する。それは、子どもが生活や遊びの中で、保育者や他児に自分の気持ちや思いを伝え表現する手段として「言葉」を用いるためである。話をしたり聞いてくれたりする中で、言葉の

やり取りの楽しさを感じ、そのやり取りを通して相手の話を聞いて理解したり、共感したりするようになっていく<sup>48)</sup>ことで、「言葉による伝え合い」の育ちと同時にそれ以外の育ちの姿もみられることになる。

本研究においても、遊びをより楽しくするために言葉を使い話し合いや相談する場面があり、これは「協同性」や「思考力の芽生え」にも通じる姿であった。また、遊びにあたっては、遊びに誘ったり、手伝ったりするため他児に声をかける姿があり（社会生活との関わり）、話し合いの場では主張や提案をしたり、折り合いをつけたりする姿や、ルール違反を指摘する姿（道徳性・規範意識の芽生え）もみられるなど、遊びを遂行する中で盛んに「言葉のやり取り」が行われ、同時に他の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と重なる姿も多くみられた。

太田は「言葉による伝え合い」の育ちは、「遊びや日々の生活の中で、発見して驚いたり不思議に思ったり何かができるようになって喜んだり、けんかをして悲しんだり心揺さぶられるような様々な体験を通じ培われていく」とし、「言葉は身近な人とのかかわりを通して獲得するものであるから、幼児が自分なりの言葉で表現することを、相手が頷いたり、言葉で応答してもらったりする体験を通じて、もっと話したり聞いたり、伝えたいと思う気持ちが『伝え合いを楽しむ』ことに繋がっていく」と述べている<sup>50)</sup>。幼児期にはこのような体験ができるようにすることが保育現場には求められる。本研究の布を用いた環境設定では、遊びの様子から「発見して驚いたり不思議に思ったり何かができるようになって喜んだり」の姿が確認でき、「伝え合いを楽しむ」ことが体験できたと推察された。

### コ 布遊びにみられた「豊かな感性と表現」

「豊かな感性と表現」とは何か。若山は、「感性」と「表現」という2つの言葉から説明しており、感性とは、カントのいう「五感を通して人が身の回りの事物の存在や特性に気付くなどする心の働きのこと」とし、表現とは、デュエイのいう「主題と制作意欲という人の内部にあるものが、事物（絵の具や声、身体など）を使用することによって外に向かっていくこと」と述べている<sup>51)</sup>。そして、この言葉の意味を理解したうえで「豊かな感性と表現」に示されている具体的な姿と実際の幼児の表現活動を照らし合わせて、幼児の資質・能力の育ちの現状を捉えていくことが保育者には求められるとしている<sup>51)</sup>。

この「豊かな感性と表現」は、領域「表現」などで示されている「生活の様々な場面で美しいものや心を動かす出来事に触れてイメージを豊かにし、表現に関わる経験を積み重ねたり、楽しさを味わったりしながら、育まれていく」<sup>52)</sup>とされている。具体的には、「豊かな感性は、自然や文化などの身近な環境と十分に関わる中で、美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、感動するところから育つもの」で、「保育者や他児

とその感動を共有し、様々に表現することなどを通して養われていく」<sup>53)</sup>。その手立てとして造形表現、音楽表現、身体表現が用いられる<sup>53)</sup>。

本研究では、幼児期におけるイメージをもって主体的にからだを使って遊ぶことによる多様な動きの獲得と豊かな感性を育むための保育環境の工夫を図ることを目的とし、その一環として布を用いた環境設定について検討している。したがって、「豊かな感性と表現」は、本研究において最も注視したい姿である。先行研究において、布の特徴を捉えた遊びが多く出現しており、布という素材の特徴からイメージし、布の扱い方とともにイメージを膨らませ創造して遊びを展開することが確認された<sup>15)</sup>。その結果から、布を用いた環境設定は、幼児自らが布という素材の特徴を活かした操作方法を創意工夫し、様々なイメージをもって遊び込む身体表現遊びに展開できる有用な環境設定であると結論づけている<sup>15)</sup>。このことから、布を用いた本研究の環境設定は、「豊かな感性と表現」を育む上で実用性が高い手立てとなり得ると考えられた。

### (2) 布遊びにみられた主な遊び・動き（動作）と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

本研究の布遊びでは、布の扱い方を試すようにまず「振る・振り回す」遊び・動き（動作）からはじまり、「床に敷いたり・広げたり」して、布団のように床に敷く、「頭に被って」おぼけになったり、仮面を作ったりする、投げてキャッチしたり、振り回したりする等、幼児は思いつくものを次から次に実践していた。やがて、誰かがからだに巻いて遊び始めると、それに気づいた他児もからだに纏い始めたため、からだに布を添わせた遊び・動き（動作）による「披る・掛ける・巻く」等が多くなった。布は柔らかく柔軟であり、端を結ぶこともできる。すると、布からイメージされる衣服ができ、「マント」や「スカート・ドレス」に見立てて遊ぶ姿も多くみられた。

また、布は容易に「振る・回す・投げる」が可能のため、布を素早く振ったり投げたりして攻撃したり、それを防御するように布を広げて盾にしたりする遊び・動き（動作）の「戦いごっこ」も生まれた。

これら幼児のどの遊びをみても「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目にあげられている条文の複数に該当していた。例えば、本研究で特にみられた遊びで項目をあててみると、次のように考えることができる。

(㉗健康な心と体、㉘自立心、㉙協同性、㉚道徳性・規範意識の芽生え、㉛社会生活との関わり、㉜思考力の芽生え、㉝自然との関わり・生命尊重、㉞数量や文字などへの関心・感覚、㉟言葉による伝え合い、㊱豊かな感性と表現)

振り回す：㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞

なびかせて走る：㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞

- 投げる：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 巻く・纏う：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 被って移動する：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 敷いて寝転がる：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 畳む：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 乗って滑る：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- ソリ遊び（単独）：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- ソリ遊び（集団）：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 走りっこ遊び：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- 戦いごっこ：㊦㊩㊵㊶㊷㊸㊹㊺

これらのことから、本研究でみられた遊びから布を用いた環境設定は、包括的に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を育むからだを使った遊びを発生させることが考えられ、環境をとおして行う教育・保育の有用な手段となり得ることが示唆された。

### (3) 環境を通した教育・保育

幼児期の教育・保育においては、認知能力だけでなく、非認知能力の獲得が重要視されてきている。それは近年の海外での研究により、幼児期の教育や保育の質がその後の育ちや学びに影響すること、そしてそれが生涯にわたって影響すること<sup>54)</sup>等が示されたことによる。この「非認知能力」とは、記憶や学習において獲得する認知能力に対し、目に見えない感情や心の動きといったような、数値化しにくい分野の能力のことを指し、幼少期ほど身に付きやすいと考えられており、それに関する政策・実践・研究が世界各国でなされている<sup>55)</sup>。

このような情勢を受け、現行の3法令の改訂（または改定）にも「非認知能力（または社会情動的スキル）」に関わる内容が多く盛り込まれ<sup>56)</sup>、よりよい環境を作ることが子どもたちの非認知能力（社会情動的スキル）を育てていく上でも重要であるとされている。そのためには、幼児教育施設では子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるように配慮すべきであるとされている<sup>56)</sup>。

我々が進めている身近にある素材を利用した環境設定は、先行研究や本研究の結果から、このような「子どもが自らすすんで楽しくからだを動かす機会が持てるような環境設定」の条件を満たしていると考えられた。よって、「子どもの主体性や自主性を育てる」有効な手段となり、そうすることで培われる子どもの非認知能力（社会情動的スキル）の育ちにも寄与するものと示唆された。

### まとめ

身近にある素材である「布」を用いた環境設定における幼児の遊びの様子を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をおいて分析し、この環境設定の幼児の発達への有用性について検討した。その結果、以下のことが判った。

- 1) 幼児は布の様々な操作とともに多様なからだの動

きを出現させ、仲間とともにイメージを共有し、自分なりに工夫したり、ルールをみつけたりして楽しむ姿が確認され、5歳児としての発達の特徴が認められた。

- 2) 本研究で実施した「布を用いた環境設定」によって、保育の内容に示された「ねらい及び内容」に基づく保育活動を通して求められる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の内容が発現することが確認された。

以上より、「布」を用いた環境設定は、5歳児の発達の視点からみても環境設定として有用であることが示唆された。

### 今後の課題

本研究は、素材として「布」に特化して検討した。したがって、他の素材を用いた環境設定での検討も必要である。また、育ちの経過を考える上でも他の年齢の幼児に対する検討も不可欠である。加えて、様々なケース（遊び方や動き）を質的、量的にも検討していくことを視野に入れて、研究を継続していくことも課題である。

### 脚注

- 1) 本研究で表記する「素材」とは、本来、運動遊具や用具として作られた物ではなく、生活用具や廃品（廃材）を指す。特に新聞紙、ダンボール、紙、布は可塑性に富み、自由に変化をつけることが可能で、子どもでも容易に扱うことができることから保育現場でも遊具として用いられることが多い。
- 2) 1980年、体育科学センター体育カリキュラム作成小委員会（石河利寛、他）は、「幼稚園児の行っている基本的な動作と体育的な活動に関する調査」により動作を示す言葉を選び、選出された各動詞を実際の幼児の活動を想定して妥当性を検討し、84種の動詞で表される基本的な動作を設定した。その選ばれた基本的な動作をガラヒュー（Gallahue, D.L. : Motor development and movement experience for young children. John Wiley & Sons, Inc. : New York, 1976）のカテゴリーに区分し、「基本的な動作とその分類」としてまとめられた。
- 3) 「保育内容5領域のねらい及び内容」および「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等について、施設の違いにより3法令で表す表現が異なる部分がある。内容そのものは共通であるため、本論文では主に保育所保育指針を引用した。
- 4) 体育科学センター（上述）における基本的動作の分類に上げられる動作の一つで、持つ・投げる・捕る・転がす・蹴る・振るなど、手や足（またはからだ全体）で物や人を扱うのに関係する動作のこと。
- 5) 体育科学センター（上述）における基本的動作の分類に上げられる動作の一つで、歩く・走る・跳ぶ・這うなど、からだを移動する動作のこと。

### 参考・引用文献

- 1) 文部省：幼稚園教育要領（平成元年告示）. 1989.

- 2) 文部科学省：幼稚園教育要領（平成29年告示）. 2017.
- 3) 厚生労働省：保育所保育指針（平成29年告示）. 2017.
- 4) 内閣府，文部科学省，厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）. 2017
- 5) 平山許江：幼児教育知の探求17領域研究の現在<環境>. 萌文書林，p.94，2013.
- 6) 松島のり子：保育の環境と領域「環境」の関係に関する一考察. お茶の水女子大学人間発達研究，31，1-16，2016.
- 7) 幼児期運動指針策定委員会：幼児期運動指針. 文部科学省. 2012.
- 8) 瀧信子，矢野咲子，怡土ゆき絵，青木理子，小川鮎子，小松恵理子，高原和子：5歳児の多様な運動経験に繋がる自発的なダンボール遊びの有用性. 福岡こども短期大学研究紀要，28，19-27，2017.
- 9) 高原和子，瀧信子，矢野咲子，小川鮎子，小松恵理子：幼児の自発的なダンボール遊びにおける動きの内容. 福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学，6，33-45，2018.
- 10) 瀧信子，高原和子，宮嶋郁恵，矢野咲子：5歳児にみられた布遊び. 九州体育・スポーツ学会第68回大会. 2019.
- 11) 瀧信子，矢野咲子，高原和子，宮嶋郁恵：3歳児の多様な運動経験に繋がる自発的なダンボール遊びの有用性. 福岡こども短期大学研究紀要，31，1-10，2020.
- 12) 高原和子，瀧信子，宮嶋郁恵，矢野咲子：4歳児にみられたダンボール遊びの実態. 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編，21，29-36，2020.
- 13) 高原和子，瀧信子，矢野咲子，宮嶋郁恵，本山司：幼児の素材遊びの検討—ダンボール遊びと布遊びを比較して—. 福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学，8，1-10，2020.
- 14) 高原和子，瀧信子，矢野咲子，青木理子，小川鮎子，小松恵理子：幼児の豊かな身体表現の出現—ダンボールの有用性—. 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編，19，67-73，2018.
- 15) 高原和子，瀧信子，宮嶋郁恵，矢野咲子：素材を利用した身体表現遊びの検討—「布」の有用性—. 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編，23，49-58，2022.
- 16) 厚生労働省編：保育所保育指針解説 平成30年3月. フレーベル館，pp.64-65，2018.
- 17) 松山益代，伊藤裕子，荒木みどり，井戸裕子，福田理恵，眞鍋隆祐：表現遊びにおける身体性と造形性—乳児期の布との関わり—. 日本保育学会第71回大会発表要旨集，369，2018.
- 18) 伊藤裕子，荒木みどり，井戸裕子，福田理恵，松山益代，眞鍋隆祐：表現遊びにおける身体性と造形性—幼児期の素材としての布—. 日本保育学会第71回大会発表要旨集，370，2018.
- 19) 古屋朝映子：保育現場における用具を活用した運動教材の一例—布を用いた運動—. 川村学園女子大学研究紀要，29（2），129-135，2018.
- 20) 梅原俊子：知的発達障害幼児の動きの獲得について—布を使った運動遊び—. 日本保育学会大会研究論文集（51），762-763，1998.
- 21) 秋江俊子，野村勝彦，安達敬子，居林弘和，岡本裕之：知的障害幼児における布を使った運動遊び. 筑波大学学校教育論集，23，15-19，2000.
- 22) 幼児教育部会：幼児教育部会における審議の取りまとめ. 文部科学省，2016.
- 23) 無藤隆，汐見稔幸，砂上史子：ここがポイント3法令ガイドブック. フレーベル館，p.17，2017.
- 24) ベネッセ教育総合研究所：幼児期から小学4年生の家庭教育調査・縦断調査，2019.
- 25) 前掲16) pp.66-67.
- 26) 前掲16) pp.68-69.
- 27) 矢藤誠慈郎：幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿③協同性. 無藤隆 編著：幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿. 東洋館出版，pp.42-43，2018.
- 28) 前掲23) p.18.
- 29) 西川正晃，煙山千尋：運動遊びにおける「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」育成の可能性Ⅰ. 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，18，79-86，2019.
- 30) 上林千秋：5歳児の協同的な遊びの発達を支える保育のポイントについての一考察. 群馬大学教育実践研究，30，169-178，2013.
- 31) 前掲16) p.70.
- 32) 佐藤有佳：幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿④道徳性・規範意識の芽生え. 前掲27) pp.44-45.
- 33) 鈴木由美子，米神博子，松本信吾，荻瑞穂，中尾香子：幼児の道徳性の発達に与える「かかわり」の影響についての研究—集団遊びによる幼児の変容を中心に—. 広島大学学部・附属学校共同研究紀要，33，397-404，2005.
- 34) 湯浅阿貴子，押谷由夫：幼児の規範意識の形成に対する保育者の保育観に関する一考察—「ずる」（自己欲求優先的行動）に対する認識からの検討—. 学苑・初等教育学科紀要，872，40-58，2013.
- 35) 前掲16) pp.72-73.
- 36) 前掲16) p.74
- 37) 増田吹子：幼稚園教育要領における「思考力」の考え方—保育要領から平成29年度版幼稚園教育要領までの変遷—. 久留米信愛短期大学研究紀要，43，1-14，2020.
- 38) 谷村紀彰，増田吹子：幼児期における思考力の芽生えと人間関係の関連性. 山陽論叢，28，161-168，2022.
- 39) 井上美智子：幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿⑦自然との関わり・生命尊重. 前掲27)，pp.50-51.
- 40) 前掲23)，p.22.
- 41) 前掲16)，p.76.
- 42) 榎原知美：幼児の数的発達に対する幼稚園教師の支援と役割—保育活動の自然観察にもとづく検討—. 発達心理学研究，17（1），50-61，2006.
- 43) 山名裕子：幼児が遊びを通して学んでいること（2）—「遊び」の中で育まれる数量感覚に着目して—. 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門，68，35-40，2013.
- 44) 榎原知美：5歳児の数量理解に対する保育者の援助—幼稚園での自然観察にもとづく検討—. 保育学研究，52（1），19-30，2014.
- 45) 森知子：幼児の発達と数量指導. 聖和短期大学紀要，2，55-62，2017.
- 46) 中橋葵，岡部恭幸：幼児期の豊かな数感覚につながる経験と保育者の援助を考える—5歳児の概念的サビタイジングの実態分析を通して—. 保育学研究，57（1），6-16，2019.

- 47) 神永直美, 栗原博之, 平野由起子: 数量・図形に親しむ経験を促す保育者の援助—遊び事例の検討から—, 茨城大学全学教職センター研究報告2021年度版, 65-79, 2021.
- 48) 前掲16), p.80.
- 49) 無藤隆 監修, 宮里暁美 編著: 新訂事例で学ぶ保育内容領域言葉, 萌文書林, pp.40-41, 2018.
- 50) 太田顕子: 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「言葉による伝え合い」に関する一考察, 関西福祉科学大学紀要, 24, 39-46, 2020.
- 51) 若山育代: 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿⑩豊かな感性と表現, 前掲27), pp.56-57.
- 52) 前掲16), p.82.
- 53) 前掲23), p.25.
- 54) ジェームズ・J・ヘックマン (古草秀子 訳): 幼児教育の経済学, 東洋経済新報社, 2015. (Heckman, James. J: Giving Kids a Fair Chance: Massachusetts Institute of Technology, 2013)
- 55) 経済協力開発機構:OECD (無藤隆, 秋田喜代美 監訳, ベネッセ教育総合研究所 企画・制作): 社会情動的スキル 学びに向かう力, 明石書房, 2018. (OECD: Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills, 2015)
- 56) 前掲23), p.8, p.76, p.85.

## 付記

本論文は、「5歳児の発達と布遊び」として日本保育学会第74回大会でポスター発表したものを加筆・修正したものである。